

---

# 10年ぶりの恋

ORIN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

10年ぶりの恋

### 【Nコード】

N1470B

### 【作者名】

ORIN

### 【あらすじ】

10年ぶりの恋にドキドキの主婦の話です。

## 第2話 転機

その日の夕食後、さりげなく話を切り出した：

「…パパ、最近できたばかりの温泉あるじゃない？この前、みんなで行った…」

「ああ…」

「あそこで清掃員募集してるらしいんだけど、面接行ってもいいかなあ…？」

「えっ?!」

それまでTVから目を離さなかった夫の顔が、こちらを向いた。予想していなかった話にキョトンとした表情。私の大好きな顔のひとだった：

そういえば、15歳も年上ながら私が夢中になった理由の一つに、時折見せる子供っぽさがツボにはまったんだっけ…

そんなことを考えていると、夫の声が聞こえてきた。「大丈夫か？やれるのか？」

「えっ?!」

今度は私が驚く番だった。ダメもとで切り出した話だったので、肯定的な返事を期待してなかったから…

結局その日は、とりあえず面接を受けてみることで、話し合いは終わった…

### 第3話 面接

翌日、さつそく電話をかけた。面接の電話をかけるのも10年ぶりなため、内心ドキドキしながら、コール音を聞いていた…。

トウルトウルトウル…トウルトウルトウル…

10コールは鳴らしたのに誰も出ない…。あと10コール鳴らしても出なかったらかけ直そう！と思っていると、やっと繋がった。

「…すみません、お待たせしました…ビルメンテナンスサービスです。」

女性の事務員が出るのかなあと思っていたので、予想外に若い男性の声に、またさらに緊張してしまった！

「…あの、お忙しいところすみません…求人広告を見てお電話したのですが…」

少し上ずった声で答える私。

「希望勤務先は、どちらですか？」

「えっと…先日オープンした温泉なのですが…」

…と、なんとか無事に面接の約束をして受話器を置いた…。

忘れないうちにカレンダーへ赤丸をつけて、力が抜けたようにソファ―沈み込んだ…

「このぐらいで緊張してて大丈夫かしら？…」

一抹の不安を感じながら、面接の日を待った…

3日後、スーツを着て面接に向かった私。通された会議室には、私より少し年上らしき課長さんが座っていた…。疲れた表情ながら温厚そうな課長さんは、履歴書に目を通すと、

「体力的な仕事ですが、大丈夫ですか？」

と聞いてきた。

「毎日、家事で鍛えてますから…」

と笑顔で答えると、

「じゃ、いつから勤務できますか？」

との質問。具体的な日にちを決めてなかった私は、とっさに…

「今週末から大丈夫です！」

と言ってしまった。

「それじゃ、土曜日からよろしく！」

呆気なく仕事が決まった瞬間だった…

## 第4話 初出勤

土曜日。初出勤の日。みんなお休みなのに、朝からそわそわ……。でも、まだ12時間以上もあるのにね…。

せっかくの土曜日なのに

「ママは疲れるといけないから…」

と、パパと子供たちだけで遊びに行ってしまった…。

「…ったく」

何となくおもしろくなくて適当に家事を終わらせて、テレビを見ながら帰りを待った…。

そして、夜の11時。子供たちも寝静まり、支度をしようと思っていると、夫がボソツとつぶやいた。「…気をつけて行ってこいよ」「うん。ありがとう…」

夫の気遣いが嬉しくって、笑顔で家をあとにした…

勤務先の温泉まで車で10分。夜のドライブを楽しみながら、目的地へ向かった。ほどなく到着すると、ドキドキしながら、事務所のドアを開けた…

「…失礼します」

と一礼して入ると、面接の時の課長さんの顔。

「…あ、今日からだだね。よろしく頼むよ。」

と、笑顔。そして、近くにいた男性二人に紹介した。「こちらが、今日から新しく入った山本さん。そして、こっちの二人が田中さんと山田くん。」

「よろしくお願ひします。」

と笑顔で挨拶すると、

「こちらこそ、よろしくー」

と二人。一人は、私と同じくらいの男性。もう一人は、20代くらいの男の子。

今日は、この二人を含む総勢6名で仕事が始まった…。

男湯、女湯に別れて全ての浴槽の清掃。

一緒のグループになった山田くんが、いろいろ教えてくれたおかげで、何とか初日を終えることができた…。

## 第5話 予感

それから、週に5日ぐったりしながら家路につく日々が続いた…。けれど、ひと月も過ぎるとバイトの人数も増え、体も慣れてきたせいか、仕事も順調にこなせるようになってきた…。

そんなある日、連絡名簿を作るため、バイト仲間の携帯番号を聞いてくれ、と課長から頼まれた。

一通り聞いて課長へFAXしようとしていたとき、

「イタ電はダメっすよ」

との声。

振り返ると、笑顔の山田くんだった。

「じゃ、ちょうど寝入ったくらいにかけてあげようか？」

と冗談っぽく言いながら、送信済みのメモをそつとポケットに入れた…。

このひと月、毎日一緒に仕事しているせいか、山田くんとは冗談を言えるくらい仲良くなった。

歳は10コも下ながら、仕事ぶりは真面目だし、ルックスもよかつたので、いつの間にか仕事に行くのが楽しみになっていた…。最近、すっかりイキイキしてきた妻に、気付いているのかいないのか、夫も「仕事きつくないか？」

と聞くくらいで、静かに見守っている様子だった…。

携帯のメモをもらってから2週間ほど経った仕事のお休みの日、仕事のことで山田くんに初めて電話をした…。

「…もしもし…山本ですけど…」

「…あ、山本さん？今日、休みですよね？」

いつもの山田くんの声。

「…あの、課長からの伝言で…」

と、何故だか悪いことをしているような気持ちで、話す私。話し終わって、電話を切るうとする私に、

「あれっ?!それだけ?デートのお誘いかと思ったのに…」  
と、いつもの冗談。分かっているも言葉が出てこない私に…  
「ウソ、ウソ、冗談!山本さん真面目だからーじゃ、また明日!」  
と電話は切れてしまった…

## 第6話 変化

また、明日…か。

そうつぶやいて私は、あつたかい気持ちになった…。山田くんは何気なく言った言葉なんだろうけど、好きな人に言われると、こんなにもハッピーな気持ちになれるなんて…

この時、初めて山田くんのが好きなんだ！って気付いた…

まさか主婦になって、10歳も年下の男の子に恋をするなんて…今までの私なら絶対ありえなかったのに。どうして、こんなに山田くんのことが…

好きになるのに理由なんかいらぬのに、理由を探している私がい…た…

翌日から山田くんに気持ちを悟られないように、以前と変わらずおしゃべりをする日々…。

告白なんかしたところで、どうにもならないし、せつかくの楽しい関係が終わってしまうことの方が怖かった…。

でも、私自身、自分の変化には気付いていた。

以前は、あんなに好きだったワイドショーや毎日ならめっこしていたスーパーの広告も興味がなくなり、昼間ぼんやりしていることが多くなった…

もちろん、家事は一通りこなしてはいるものの、なんだか心ここにあらず…という感じで、自分の居場所が変わってきていることにも…

そんなある日、体調を崩した私。一応、仕事は出勤したものの、結局、早退してしまっ…た…

帰り際、山田くんが

「明日、俺、休みなんで…明日ムリそうだったら、休み代わりますから…」

と優しい一言。

「ありがとう……」

笑顔で職場をあとにした……

なんとか無事に家についた私は、着替える間もなく吸い込まれるように眠ってしまった……

## 第7話 電話

翌日、日曜日だったこともあり、お昼まで眠っていた私…  
起きてリビングへ降りてみると、

『ママ、おはよう。パパと動物園に行ってきます。ゆっくり休んで  
ね』

と子供のメッセージ…

パパと子供たちの心遣いがうれしい反面、今の自分の心の変化に罪  
悪感を感じた…。

それを振り払うかのように

「いいお天気！お布団干さなくっちゃ…」

と言いながら、寝室へ向かった…

その時、寝室に置いていた携帯が鳴った…

番号通知を見ると…山田くんだった！

「もしもし…」

「あ、山本さん？山田です。体の具合どうですか？」

いつもより丁寧な口調の山田くん。

「うん…さっきまで寝てたから、元気復活！」

「よかった…元気そうで。」

「心配してくれてありがとう」

「…日曜日だし、家族の人もあるかと思うと、緊張しちゃって…」  
と山田くん。

「気を遣わせちゃってゴメンね。でも、ちょうどみんな出かけてる  
んだ…」

「そっか…よかった…」

ちよつとホツとした様子の山田くん。

「…山田くん？今日は仕事行けそうだから、予定通り休んでね。」

「あ、うん…」

と言葉少なな山田くん。

「それじゃ、心配してくれてありがとう。また、明日ね…」  
と言って電話を切ろうとした時…

「…また、時々電話してもいいかな…」

と山田くんが言った…

突然のことでビックリした私は、すぐに返事ができなかった。する  
と…

「ゴメン。変なこと言って…今の忘れて。」

と電話を切りそうなる山田くんは、

「…いいよ。私なんかでよかったら…いつでも話し相手になるよ…」

と慌てて返事をした…

## 第8話 メール

その日の夜、職場に着いたとき、携帯が鳴った…

『今日は、ありがとうございます（＾|＾）仕事頑張って下さい（＾0＾）』

山田くんからのメールだった。

昼間、あれからメール交換した私。男の子からのメールなんて初めてなので、ドキドキしたけど、メールを見てジェネレーションギャップを感じたのも事実。だって、女の子からのメールと変わらない絵文字の入った可愛さ！絶対、夫からのメールでは有り得ない！！イマドキの子って、こうなんだあ…と感じながら、メールの返事を打った…

『こちらこそ。心配してくれてありがとう（＾-＾）これから頑張ってきてまーす（@|@）』

なんだか独身時代に戻ったようなドキドキ感。ウキウキしながら、事務所のドアを開けた…

仕事を終えて家に帰ると、さっそく携帯を充電する私。こんなこと今までなかった！

だって今までだったら、電池切れまで充電しなかったし、切れても2〜3日ほったらかしなんて当たり前。基本的に携帯が無くても困らなかつたから…。子供達にも

「携帯の意味ないじゃん！」

って言われてたっけ…

そんな私が携帯を気にしてるなんて…自分でもおかしかった…

一応、無事に仕事を終えたことだけでも伝えようかな…と思い、携帯を取った。

『今日は無事仕事を終えました〇( ^ - ^ ) 〇心配してくれてありがとう( ^ 〇 ^ )』そうメールを打つと、ベッドに入った…  
やはり疲れていたのか、あっという間に眠りについた…

## 第9話　メル友？

翌朝、皆を送り出して朝食を食べ始めた時、携帯が鳴った…

『おはようございます（＾Ｏ＾）昨日はお疲れさまでした（＾＾ゞ俺もこれから学校行ってきます（＾Ｏ＾）／』

と山田くんからだった。

そういえば、昼間専門学校に通ってるんだっけ？以前に聞いた話を思い出しながら、返信ボタンを押した。

『おはよう（＾・＾）（メールありがとう）（＾Ｏ＾）（学校、気をつけて行ってらっしゃい）（＾Ｏ＾）／』

と送信ボタンを押した…

『元気そうですね（＾Ｏ＾）今日は、いい天気なのでサボりたい』

と返事が…。さすが、最近の若者！メールの返事の早さにびっくりしながらも、すぐ返信した。

『ダメだよ！さぼったら！ちゃんと学校にいくんだよ（-\_-）』

すると、また返事が…

『はい（＾Ｏ＾）／わかりました…またバイトで（＾Ｏ＾）』

子供っぽい山田くんを想像しながら、返信した…

『分かればよろしい…（＾Ｏ＾）またバイトでね（＾Ｏ＾）／』

そうして、携帯を閉じた…

外は、山田くんの言う通りいい天気。そこで、久しぶりにデパートへ出かけた。

もうすぐ夏休み…という季節もあって、売場はカラフルな夏物商品で溢れかえっていた…

「…コレ、山田くんに似合いそう…」

いつの間にか紳士服売場に来ていた私…

これからの季節にピッタリの鮮やかなブルーのＴシャツに目を奪わ

れた…

2時間ほど楽しんで、紙袋を片手にデパートをあとにした…

## 第10話 恋？

その日の夜、職場の駐車場へ着くと、事務所へすぐ入らず、少しの間、車の中に居た私：

5分程して山田くんの車が駐車場に入ってきた：

車が止まったところで、携帯に手を伸ばす私。

トウルトウルトウル：

「…もしもし…」

と、山田くんが出た：

「…山田くん、今日はちゃんと学校に行った？」

冗談ばく聞く私。

「もちろん！真面目な俺なのに…」

と山田くん。

「じゃ、真面目な山田くん、仕事も真面目にしようね」

と私。

「あつたりまえじゃん！」

とちよつと偉そうな口調の山田くんがかわいくって、思わず笑ってしまった：

「…じゃ、遅れるから切るね。また後で！」

「…また、後で。」

山田くんがそう言うのと、時間を見ながら携帯を切った。

「5分前か…急がなきゃ！」

そう呟いて、急いで車を出た：

仕事の始まる1分前、事務所に駆け込んで来た山田くん。

「ギリギリセーフ…」

とか言いながら、タイムカードを押す山田くんの後ろ姿を見ていた私。

少しばあーっとしていた私は、振り返った山田くと目が合ってた。

キツとした。そんな私に、いたずらっ子のような表情で、

「さあ、仕事、仕事…」

と言いながら、私の肩をぽんとたたいて通りすぎた…

仕事中でも、なんだかフワフワした感覚が抜けなくて、気がつくとも山田くんの姿を探している私。

なんか片思いしてた学生の頃みたい…と一人苦笑してしまった…

仕事が終わりに駐車場へ向かうとき、隣を歩いていた山田くんが、耳元でささやいた。

「…あんまり、仕事に見つめられると集中できないんで…」

気付いてたんだ！そう思うと、顔から火が出そうなほど恥ずかしくなってしまった…

## 第11話 私の気持ち…

結局、何の返答もできず、帰宅した私…。本当に、山田くんを恋を  
してしまっただろうか…？というか、これが恋なんだろうか…？  
長い間、平凡な主婦をしていたせいも、現実味がわからない…。好き  
なのは確かだけど…

冷静に考えて家庭を捨ててまで…というわけでもないしなあ…なん  
てぼんやりしていると携帯が鳴った…

『さつきは、からかってゴメン。気にしないで。』  
とのメール。

ちよっと気が抜けた私も、返信した。

『こちらこそ。今度からは気をつけます( ^ 0 ^ ) /』  
と打ち返した…

翌朝、みんなを送り出してから、携帯を取り出した。

「充電OK…」

なんて携帯を見ながら呟いている私…。冷静に考えてみると、以前  
の私では考えられない行動だ！バイトを始めるまでは、携帯の充電  
が切れていても携帯が行方不明でも大して気にもとめなかったのに  
…。

それが、今では毎日充電して、絶えず身につけているなんて…

でも、山田くんからの電話やメールの回数が増えていくことが、日  
々の楽しみでもあり幸福でもある今、自分が変わっていくことは仕  
方ないとも思う。

そんなことを考えながら携帯を眺めていると、メールが入った…。

『おはよう！元気？今から学校行ってくる( ^ 0 ^ ) /』

山田くんからだった。

『おはよう！サボらず学校行くんだね。えらい、えらい( o ) ( o )  
何だか子供にメールしているような文面になってしまった…』

山田くんも、そう感じたのか

『なんか…子供扱いしてない？（…）』  
『すぐ返事が返ってきた…』

## 第12話 夫のこと…

「だって子供じゃん…」

私は、そうつぶやいた。実際10コも年下の彼。男性として好きなのか、子供や弟を思うように母性をくすぐられて好きなのか、今は分からない。

恋愛に年齢は関係ない！なんて言うけど、本当にそうだろうか…？真剣になればなるほど、悩んでいる人は多いんじゃないだろうか？ふと夫のことを考えた。そう言えば、出会ったのは私が20歳で夫が35歳だったっけ…。バツ1だった夫が落ち込んでいたのを見て、食事に誘ったのが始まりだったけど…付き合い始めてもなかなか手を出さなかったっけ…（笑）

最初は真面目な人なんだあと思ってたけど、きっと今の私みたいに悩んでたのかもしれない…

そう考えると、この10年、子供を育てるように優しく夫なりに見守ってくれてたのかもしれない…

口数の少ない人だから、本当の気持ちは分からないけど、何となく夫のことが分かったような気がした…

そんなことを考えると、たまたま若い男の子が、私に興味を持ってくれたことを、単純に浮かれていいんだろうか…？

「現実にはドラマみたいに単純じゃないもんなあ…」

携帯を眺めながら返信しようか悩んでいると、電話が鳴った…

「もしもし…」

「山本さん？おはよう…」

山田くんからだった。

「メールの返事がないから電話したんだ！」と弾んだ声。

「ごめん…ちょっと考えごととして…」

「それって俺のこと？」

冗談ぽく言う彼に

「さあ…それは内緒！」

とはぐらかした…

### 第13話 映画館で…

たわいない話をした後、電話を切った私。

家事を済ませて、久々に映画でも観てこようと思い、身支度を始めた…

何を観るかは決めていなかったの、行ってから選ぶことにした。何ヶ月ぶりかの映画館。何が上映されてるんだろう…と思いつながら、一覧表を眺めていると、向こうから見慣れた顔が…

「あ…山田くんだ！」

「まったく…学校サボって！一言声をかけようと思って一歩足を踏み出したとき、隣に可愛い女の子が見えた…。二人は楽しそうに笑っていた…。

とつさに後ろを向いた私は柱の陰に隠れた…。

二人は、そのまま楽しそうにしゃべりながら、映画館を出て行った…。

後ろ姿を見つめながら、すごくショックを受けている自分に気付いた。

二人が出て行った扉をしばらく見つめていたら、いつの間にか涙が頬を伝っていた…。慌てて化粧室へ入ったけど、涙が止まらなくなかなか出ることができなかった。

結局、映画を観ることもなく逃げるように家に帰った…

そのまま寝室にこもって泣いているうちに、いつの間にか眠ってしまった私。子供たちの

「ただいま…ママ具合悪いの？」

と言う声で目が覚めた…

「おかえり…大丈夫だよ。ちょっと疲れただけだから…すぐ、おやつを用意するね。」

そう言っって顔を洗おうと洗面所へ…。でも、鏡に映った自分の顔はひどかった。なにもかも消し去りたい気分でもう何回もゴシゴシ顔を洗

った…

とりあえず、平静を装いながら普段通り家事をこなした。けれど、刻々と近づくバイトの時間が怖かった。いつも通りに山田くんに接することができるのか正直自信がなかった…

第14話 あきらめ…(前書き)

つたない作品をご覧ください。ありがとうございます。のんびりペー  
スで投稿しておりますので、気長にお付き合いくださいませ(^-  
^-) /

## 第14話 あきらめ…

夜、バイトの時間始まる1時間前、メールが入った。『急用で出勤できなくなっただので休みます。みんなに伝えといて!』

山田くんからだった。

メールを見た瞬間、正直ホツとした。昼間の女の子とデートなんだろうな…と予想はついたけど、今の私の状態の時を見られるより、よっぽどよかった。

それから、職場に着くと

「山田くん、今日お休みだそうです。」

と業務連絡みたいに簡単に伝えて、仕事の準備に取り掛かった…。いつもは大変だけど楽しい仕事が、なんだか現実味がなくて淡々とこなす工場労働者の気分だった。

黙々と体だけ動かしながら、頭の中は山田くんのことについてばいだった。

まず、昼間の女の子、若くて笑顔も可愛くて…私が男でも、つい目が向いてしまうようなタイプ。山田くんと並んでいると、本当に似合いのカップルだった。今まで山田くんと会話で彼女の話題はなかったけど、特定の人がいることは、なんとなく感じていた。ただ、今思うと意識的にその話題は避けていたのかもしれない…

「天罰かしら…」

そう呟いて考えた。昼間の出来事は神様からの警告なのかも…

神様なんて信じていない私がこんなことを考えるのは笑っちゃうけど、浮かれてないでもっと現実を見なさい! ってことなんだろうな…。今ならきつと山田くんのことを諦められると思うし…

頭の中で、山田くんのことを諦める方向で自分に言い聞かせながら、その日の仕事を終えた…。

「お疲れさまでしたー」

皆に挨拶をして事務所をあとにした。

車に戻ると、携帯にメールの着信があった…

『お疲れさまです(^^)〇〇( ) /今日はサボってすみませんでした(

^^)明日はバイト行きます!おやすみなさい…』

着信時間を見ると5分ほど前だった。

慌てて返信ボタンを押すと『明日はサボらないように!おやすみな

さい…』

と急いで送信した…

## 第15話 決心

さつき諦めよう…って決めたのに、たった一通のメールで揺らいでしまうなんて…我ながら意志の弱さに笑ってしまふ…。

でも、眠いのを我慢して、バイトの終わる頃にメールをしてくれる心遣いが嬉しかった。バイトを休んだことや彼女とのデートのことなど負い目があるのかもしれないけど、今の私にとって、そんなことはどうでもよかった…。

やっぱり、山田くんが好きなんだ！無理に忘れることはできそうにないし、第一、山田くんは私のことなんて恋愛対象としてないかもしれない…。私の片思いだとしたら、韓流スターに恋するのも、同僚に恋するのも同じじゃない？

考えてるうちに、思考回路がおかしくなっちゃったのか、変なこじつけみたいになってる自分がおかしかった。

けれど、夫もいて子供もいて、もうすぐ介護が必要になる親がいて…自分の人生はこの場所から動かせないけど、心だけは自由でいたい！

だから、片思いでもいいじゃない！山田くんの興味が失せるまで、メル友でも同僚でもいい！そばにいて見つめていたい！

今の自分の正直な気持ちを再確認して何だかスッキリした私。数時間前、あれだけ落ち込んだり悩んだりしていたのが嘘のよう…

もう悩まず、まっすぐな気持ちで山田くんのことを見つめていこう！家族と同じように大切な人だから…

そう決心したら、気持ちも穏やかになって自然と笑みがこぼれてきた。

「さあ、急いでかえらなくっちゃ！」

そうして車を発車させた…

第16話 驚き…(前書き)

あけましておめでとございます。体調を崩していたため投稿が遅れてすみません。ゆっくりのペースですが、気長にご覧くださいね  
… (^o^ ) /

第16話 驚き…

翌朝、いつもよりスッキリした気分が目覚めた私。

いつも通り、夫と子供たちの朝の支度をして送り出した。

「今日もいい天気！」

昨日、涙で濡れた布団も干して掃除を終えると、一休み…すると、いつもの時間に携帯が鳴った。

「もしもし…」

電話に出ると、

「おはよう…昨日はバイト休んでゴメン…忙しかった？」

普段通りの山田くんの声。

「そうだよ！急に休むんだもん。すごく忙しかったんだから…！」

と冗談ぽく大袈裟に言うのと、

「…ゴメン。そんなに忙しかった…？」

ちよっと反省している様子…。

少し冗談きつすぎたかしら…？と思いつつながら、

「今度は、ずる休みダメだよ！今日は出勤だよね…？」

と聞くと…

「うん…」

と一言。

「…じゃ、今夜バイトでね！」

少し元気なさそうな様子が気になったけど、そのまま電話を切った。

電話を切ったあと、意外にも普段通りに接している自分に驚いてい

た…。やっぱり、私って神経図太いのかしら…？

なんだか昨日あれだけ泣いていたのが、ウソのように思えておかしかった…。

その夜、いつもと変わらずギリギリの時間に出勤してきた山田くん。特に変わった様子もなく、仕事をしているように見えた…

仕事を終えて、駐車場までの帰り道、山田くんから切り出した…

「…明日、暇？」

「えっ?!」

「デートしようか…」

突然の誘いにビックリして、言葉が出なかった…

黙っている私に、山田くんは、もう一度たずねた。

「…明日、都合悪い？」

人間、憧れていたことが現実になると、思考回路が止まるのかしら…?返事をしなきゃと思うのに言葉が出ない!どうしよう…

## 第17話 変更…

「…いいよ」

やっとのことで出た一言。あまりにも小さな声だったので、

「えっ！何？」

と聞き返された。

もう一回言うのも恥ずかしかったけど、

「明日、空いてるよ…」

と言ってうつむいてしまった…。だって嬉しさと恥ずかしさで、山田さんの顔もまともに見られないから…。でも、どうして私とデートなんだろう…？

そんなことを考えながら、山田さんの言葉を待った…。

「本当？じゃ…映画でも見に行く？」

「えっ?!映画？」

昨日の今日で映画を見に行く気分じゃなかったけど、山田さんの提案を断ることもできなかったので、待ち合わせの時間と場所を決めて、その日は別れた…。

眠れないまま、朝を迎えた私…。でも、いつものように朝の支度を  
して、夫と子供たちを送り出した…。

ひとりになってホッとしたのもつかの間、携帯が鳴った…。

「おはよう…」

いつもより元気のいい声。ちょっとびっくりしながら、

「おはよう、山田くん」

と私。

「あのお、デートの件だけ…」

やっぱり、断りの電話かな…？そう思いながら、耳をすましている  
と、

「明日じゃなくて、今日今からはどうかなあ？天気もいいし…映画  
じゃなくてドライブとか…」

急な変更にとまどいながらも、断る理由もなかったの、最寄の駅まで迎えに来てもらうことにした。

電話を切ったあと、急いで片付けて支度にかかった。

「どうしよう…何着て行こう…」

夫以外の人とデートなんて何年ぶり？

それも相手は自分よりも10コも年下。

あんまりオバサンばくならないように、かと言って若作りしすぎも

なあ…なんて考えながら服を選ぶ私。

なんだか独身の時みたいだなあ…

なんとか時間までに支度して急いで家を出た…

## 第18話 初デート

家を出てすぐ、携帯が鳴った。

「もしもし…」

「あ、俺。もう着いたから。」

「ほんと?! すぐ行くからっ!」

「うん、分かった。」

電話を切って急いで走った…。

いつもは、歩いて5分の道のりを走って3分。運動不足の私にしては、かなり頑張ったかな。

そして、駅に着いたとき、車に乗っている山田くんを見て、胸がキーンとなった。

30過ぎの私が言うのもおかしいけど、学生のとときの初デートみたい…そう、昔に戻ったみたいな感覚…

でも、山田くんに声をかける前に、コンビニの窓に映る自分の姿を見て、そんな気持ちも風船がしぼむように小さくなってしまった…だって、急いで走ったせいで髪はボサボサ、顔は真っ赤、服まで乱れる始末…。とても、これからデートするような姿じゃなかった。

少し身なりを整えようと窓に近づくと、私の後ろにもうひとつ顔が…!

振り向くと山田くんだった。

「どうしたの? 山本さん? 待ち合わせ、コンビニだった?」

「…いいえ、駅前で合ってるよ。」

「そっだよね…車、あっちだから行こう!」

そう言っつて、私の手を取る山田くん…

あまりにも自然に手をつないだので、恥ずかしいを通り越して、ぼーっとしてしまった…

きつと端から見たら、若いお兄さんに引っ張られている、変なオバサン? だったかも…

ぼーっとしている間に、車に乗せられ、気がつくと海岸線を走っていた…

「…山本さん、大丈夫？気分でも悪い？」

と、山田君の声。

やっと現実の世界に戻った？！私は、

「うん、大丈夫…」

と言いながら、窓から見える海を眺めた…

## 第19話 小さな島の…

本当に今日は、いい天気だった…。窓から見える海も穏やかで、入ってくる風も心地いい…

しばらく会話もなく、車を走らせていた山田くん。そういえば、何処へ向かっているんだろう…？

そんな気持ちを見透かしたように、山田くんが声をかけてきた。

「山本さん、何処に向かっているか分かる？」

「さあ…」

「静かで、とてもいい所なんだけど…山本さん、絵は好き？」

「えっ？嫌いじゃないけど…」

「よかった。じゃあ、楽しみにしてて。」

と、笑顔の山田くん。

でも、正直なところ絵画を観るなんて、年に1回くらいで、特別詳しいわけでもなかった…

山田くん、絵画観賞も趣味なのかなあ…？

そんなことを考えているうちに、車は高速道路へ入った…

えっ?!何処へ行くの…？

そんなに遠出するとは思わなかったもので、少し不安になった。子供たちが、帰ってくるまでに戻れるかしら？高速に乗って1時間、着いた所は小さな島にある大きな美術館だった…。

以前、TVでも紹介された所で、1度は行ってみたいなあ…と思っていた。

「山本さん、ここ来たことある？」

「いいえ…初めて。行ってみたいなあとは思ってたけど…」

「…よかった…ここ、美術館も素晴らしいけど、まわりの景色も最高なんだ…」確かに周りは海で囲まれて美術館の建物も違和感なく風景に溶け込んでいた…

私たちは、お昼時だったので、まずはランチをとることにした。

美術館に隣接してあるレストランは、平日にも関わらず賑わっていた…

地中海のイタリアをイメージしたような造りで、雰囲気もよかった。

「…ここでもいい？割とランチも安くておいしいんだけど…」  
と山田くん。

「いいよ。雰囲気もいいし、料理もおいしそう…」

席に着くと、私たちは周りの人達が食べているミニコースのランチを注文した。

## 第20話 夕日の中で…

食事がくると、バイトのことや山田くんの学校のことなどで会話が弾んだ。

あつという間に1時間が経ち、私たちはレストランをあとにした。美術館へ入ると、壁一面にルネッサンス時代の壁画がお出迎え。もちろん複製なのだろうけど、素敵な作品…。以前からイタリアに行きたかった私にとって、美術館の中の作品は、どれも素晴らしかった。それに加えて隣にいるのが、山田くんだったことも感動が倍増した要因かも…

本当は、もっとゆっくり眺めていたかったけれど、時間も差し迫ってきたため、私たちは中庭へ出た…。

「…なかなかいい美術館でしょう？」  
と山田くん。

「うん…素敵だった…」  
まだ余韻に浸っている私に、山田くんが言った。

「…時間がないのは分かっているんだけど、あと30分ここで待ってくれるかな？」

「えっ？」  
「すごく感動すると思うんだ…」

その自信たっぷりな笑顔に引き込まれるように、私はうなずいていた…。小さな島の小高い所にある美術館からは180度海が見渡せた。

ちょうど日も暮れかかって波に映る夕日がとてもキレイだった…

「…キレイでしょう？これからもっと綺麗な夕日が見られるよ。」  
後から声がしたのと同時にゆっくり優しく抱きしめられた…

「山田くん…」

突然のことでビックリした私は言葉が出なかった…

「好きなんだ…」

そう言って振り向いた私にキスをした山田くん…

そのまま抱きしめられて私は夢か現実か分からなくなってしまうた

…

## 第21話 記憶の中で…

このまま時間が止まってしまえばいいのに…  
ゆっくりと沈んでいく夕日に周りのオブジェが照らされて…そのオ  
ブジェに囲まれた私たちも作品の一部になったように風景に溶け込  
んで…

この瞬間を永遠に忘れたくない…と思えるほど、幸せな時間だった…

ふと気がつくと、白い無機質な天井…

えっ？何？今までののは夢？そんなはずは…だってまだ抱きしめられ  
た感触が腕や肩に残ってる…

でも、私どうしてベッドにいるのかしら…？

体もなまりのように重たくて動かすこともできない…冷静に落ち着  
いて、周囲を見回してみた…

自分の寝室ではないことはすぐ分かった。

ポタン、ポタン…規則正しく落ちていく液体…点滴だった…

…病院？！どうして？私、病院なんか…？混乱している記憶の糸  
をゆっくりと解いていった…

そうだ！あの時、夕日が沈むまで山田さんに抱きしめられてたんだ…  
それから予定より帰る時間が遅くなって…

「ごめん…ゆっくりしてたら遅くなってしまった…」  
と山田くん。

「いいよ…楽しかったし。それに夕日も素敵だった」

「…夕日だけ？」

と悪戯っぽく笑う横顔に、つられて私も笑ってしまった。

「山田くんも素敵だよ、大好き…」そう言って、その横顔にそっとキスをした…

普段ならそんなことをする勇気もないのにね…

でも、余韻に浸る間もなく、私たちは島をあとにした…辺りは、すっかり暗くなって、さっきの景色がウソのよう…

一応、家には遅くなるので、昨日のカレーを温めて食べるように伝言しておいた…

## 第22話 悪夢のような…

「家の方、大丈夫…？」

心配そうに私を覗き込む山田くん。

「大丈夫よ、晩ごはんは昨日のカレーだし…」  
と明るく答えた。

すっかり暗くなってライトアップされた高速を走りながら、私はさ  
つきの光景を思い出していた…。

きつと今日という日は、一生忘れられないだろうな…そんなことを  
考えながらぼんやり外を眺めていると、運転席から声を掛けられた  
…。

「大丈夫？ 疲れた？」 「うん、大丈夫…」

「1時間くらいかかるから、眠っててもいいよ…」

「ありがとう… 疲れたらそうするね…」

こういう山田くんの気遣いも嬉しかった…。

しばらく窓から規則正しく並ぶライトを眺めているうちに、私は、  
いつの間にか眠ってしまった…

けれど… しばらく眠っていた私を起こしたのは、体中に響く衝撃音  
だった…

一瞬、何が起こったか分からず、なぜ動かない体に驚きながら、  
ゆっくり目を開けてみた… が、目の前の事実が信じられず、そのま  
ま気を失ってしまった…

本当に信じられない光景だった…

粉々に割れて失くなったフロントガラス…

目の前にあるはずのない、運送トレーラーのボディと散乱した車の  
部品？ や荷物…

なにより、隣にいるはずの山田君の姿が…ない！  
動かない首の代わりに、精一杯視線を向けるものの、視界の中にその姿を捕らえることはできなかった…  
きつと気を失うまで数秒足らずのこの光景は、まさに悪夢のようだった…

今、やっと自分の状況が少しずつ分かってきた…  
帰り道、私が眠っている間に事故に遭ったんだ…  
一応、私は助かったみたいだけど、山田くんは？  
山田くんは、どうなったんだろう…？

## 第23話 家族との…

病院のベッドの上で、空白の時間を取り戻すかのように、ゆっくりと確実に記憶がよみがえってきた…。

でも、やっぱり山田くんがどうなったかは、わからない…。最悪の事態も考えたくはないけど、考えずにはいられない…。動かない身体のもどかしさも加えて、本当にどうしたらいいか、わからなかった…。

どれくらいの時間、ぼんやりとしていたのか、しばらくすると外が騒がしくなってきた。

そして、急にドアが開くと、夫と子どもたちが入ってきた。

「…大丈夫か？俺が誰か分かるか？」

「ママー！大丈夫？痛くない？」

「ママ…ママ…」

子どもたちは、安心したのか泣き出してしまって、夫の目にも、うつすら涙が浮かんでいた。

その姿を見た時、自分がなんて「浅はか」だったのか、痛感した…。

ああ…一人の人間として、女性として生きる前に、家族として守らなくてはいけないものがあつたのに…。

「…ごめんね…」

怪我をしていたため、その「ひと言」を言うのがやっとだった…。

10分ほど子どもたちと一緒にいたあと、夫は子どもたちを家に連れて帰った。

帰り際、「後で、また来るから…」と言いついて残して…。

それから1時間後、夫が戻ってきた。

「…ちよつと、いいか？」

私は、少し頷いた。

「…何から話したらいいか…あの男…山田君だったか…今も意識不明の重体だそうだ。」

私の目から涙が流れ落ちた…

「…事故の原因は、対向車がセンターラインを越えて突っ込んできたからだそうだ…とつさに、山田君がハンドルをきってくれたおかげで、おまえは助かったのかもしれない…」山田くんらしい…と胸が痛くなった…

## 第24話 対峙

1時間ほどして病室へ戻って来た夫…。

何から話していいか分からない様子で、しばらく沈黙が続いた…

「…博子、相手の山田君…だったかな…意識不明の重体だそうだ…」  
何も言えない私は、ただ涙が溢れそうになるのをぐっとこらえていた…

「…山田君に非があるわけではなく、対向車のトレーラーがカーブを曲がりきれず、突っ込んできたらしい…。でも、とつさにハンドルを左にきつてくれたおかげで、おまえは助かったんだと思う…」  
それを聞いたとたん、ぷつんと何かが私のなかで切れたようで、涙がとめどなく溢れ出た…

自分が危なくなるのが分かって、私のために精一杯のことがとつさにできるなんて…本当に山田くんらしい…

何だか、すぐそばに山田くんがいるような気がして、いるはずのない彼の姿を探してしまった…

「…こんなときに…と思うんだが、いつからなんだ？山田君との…」  
最後まで言いたくなかったのか、語尾を濁した夫…

事故に遭ったのも、もちろんショックだっただろうけど、男と一緒にだったことの方が、きつとショックだったに違いない。

怪我のため話しづらい私は、ゆっくり時間をかけて正直に話した…  
私の話を静かに聞いていた夫は、

「…博子、おまえは、あいつが好きなのか？」  
さっきまで

「山田君」だったのが

「あいつ」になっていることに驚きながらも、ゆっくり頷いた…

「…家族…子供たちを捨ててまで一緒にになりたいか？」

その質問には答えられず、黙って俯いてしまった…

## 第24話 対峙（後書き）

主婦 博子の恋をHAPPY ENDにするべきか…思案中です。  
最後まで見届けてくださいね（＾O＾）ノ

## 第25話 面会

黙っている私に夫は、こう言った：

「博子、今すぐ返事しろとは言わない…当分は、おまえも入院生活だし…退院するまで、しばらく時間がある…ゆっくり考える…」  
そして、静かに病室から出て行った…確かに今は生きてること自体に感謝しなくちゃならない身だけど、退院後のことを考えたら、いつそのこと死んでしまった方がよかったかも…と思ったのも事実だった。

でも、助かった今、生死をさまよっている山田くんにも生きてほしい…  
たとえこれから先、二度と会うことが許されなくても…  
これが正直な今の気持ちだった…

いろんなことがありすぎて疲れてしまった私は、山田くんのことを考えながら、いつの間にか眠ってしまった…

どれくらい眠っていたのか…ふと目を開けると見知らぬ女性の顔が見えた。

不安げに覗き込むその顔は、なぜか懐かしい感じがした…

「…や、山本さんですか…？」

おずおずと尋ねる女性…

横になったまま私は、小さく頷いた。

「…私、山田でございます…山田拓也の母で…」

突然のことで声も出ない私は、静かにその女性を見つめた。

50代前半とおぼしき感じで、事故のショックで憔悴しきってはいれるものの、美人というより可愛いらしいタイプに見えた。

「…この度は、息子のせいで大変なことになってしまって…本当に申し訳ございません…」

深々と頭を下げられてしまった…

突然の面会で謝罪を受けた私は、申し訳ない気持ちでいっぱいになった…

## 第26話 母親

ご自分の息子が、生死をさまよっているときに、同乗者にも謝罪に来るなんて…なかなか気丈な方ではないとできることじゃないと思う。最愛の一人息子と過ごしていた女性が、私みたいな主婦だと知って、どう思ったんだろう…？

同じ母親の立場で考えると、本当に自分が恥ずかしくなった…。

「…最近、拓也が楽しそうにしていたので、好きな人でもできたのかなあ…とは思ってたのですが、まさか山本さんのような方だとは思ってもよらなかったの、正直、戸惑ってます…」

「…けれど、息子がこうなった今、もう関わらないでほしいんです…」  
と、はつきりとした口調で言われた…。

正直、面と向かって言われるとショックだったものの、予想していたことでもあったので、私は、ゆっくり頷いた…

息子の様子が気になるので、今日はこれで失礼します…と言い残して、山田さんは出て行った…

独り病室に残された私は、山田くんとは、もう二度と会えないんだ…と実感して例えようのない虚しさで、押し潰されそうになった…目を閉じると浮かぶのは、夕日の中でしっかりと抱きしめてくれた山田くんの姿…。抱きしめてくれた肩も、キスをしてくれた唇も、まだ感触が残ってる…

数時間前まで、あんなに幸せだったのに…どうして…どうしてなんだろう…

主婦は恋することも、神様は許してくれないのかしら…

彼の姿を見ることも、話すことも許されない私は、思い出だけを糧に残りの人生を過ごさなければならぬのか…と思うと涙が止まらなくなった…

そして、今やっと分かった。私が愛しているのは、彼なんだと…

## 第26話 母親（後書き）

あと少しで、完結です。自由なようで、自由な人生を送れない主婦。日々、家族のために頑張っている女性達は、幸せでもあり不幸せかもしれません…。自分の気持ちに正直に生きることの難しさを感じてるのは、彼女たちのような気がします…

## 第27話 永遠に…

自分の気持ちに気付いてもどうすることもできないまま、時間だけが過ぎていった…

心の傷はどんどん深くなっていくのに、体の方は徐々にではあるものの、確実に快方に向かっていく現実…

本当にどうしていいか分からない…

けれど、心配して毎日来てくれる子供たちに涙を見せるわけにもいかず…

心とはうらはらに笑顔でいることが、本当につらかった…

そんな生活が、ひと月ほど過ぎた頃、夜、夫が一人でやって来た…

「博子、山田君が亡くなったそうだ…」

感情を押し殺したように、淡々と話す夫…

一瞬、言葉の意味が理解できずに、夫の顔を見つめ返した。

夫は、私と視線を合わすのを避けるように、窓を眺めながら告げた…

「…今朝、山田君の母親から電話があつて…先週末に容態が急変して…本当に急だったらしい…」

昨日、告別式も終えて、少し落ち着いたので、連絡してきたのと…

夫の話す言葉も途中から耳に入らなくなった私は、布団を頭からかぶり、声を押して泣いた…

泣いて…泣いて…本当に涙が枯れるまで泣いた私が布団から出ると、夫の姿はもうなかった…

最悪の事態も覚悟はしていた…

山田くんが同じ病院に運び込まれて2週間。依然、意識不明のままだったため、山田くんの実家近くの大きな病院へ転院したのは、親しくなった看護婦さんから聞いていた…

けれど、そんなに危険な状態が続いていたなんて…

最後のお別れも伝えられないまま、本当に永遠に彼を失ってしまっ  
た…

## 第28話 10年後…

あれから、10年の月日が流れた…いろんなことがあった…

同居していた夫の両親が旅立ち、子供たちも来年の春には巣立っていく…

そして、夫は定年退職…

あの事故があつてから、家族には、たくさん迷惑をかけたと思う。

私が3ヶ月入院している間に、マスコミとかご近所、親戚の対応を夫は何も言わず引き受けたいらしいし、子供たちも少しいじめられたようなのに、私には何も言わず、まっすぐ素直な子に育ってくれた…  
退院後もみんなあのことには一言も触れず、10年間、表向きは平穏な生活だった…

私は、この10年、心の時計は止まったままだった…

あれからは専業主婦に逆戻りしたものの、家族のためだけに時間を費やした…

ただ、空いた時間に考えるのは、いつも山田くと過ごした思い出だった…

瞳を閉じると昨日のことのように思い出されるあの山田くんの笑顔…

そして、最初で最後のデートになったあの島の夕日…

何もかも鮮やかに思い出せるのに…山田くんだけがいない…その現実を受け入れることが10年経った今もできないでいた…

そして、夫が退職する前日、白い封筒を渡された…

「これは…?」

と私が尋ねると、

「明日で退職だから、週末旅行でも…」と思つてさ

中を開けてみるとJRの切符が1枚…

夫を見ると同じ封筒を手に入っていた。

「駅で待ち合わせしよう!日曜の朝10時に…」

「ええ……」

返事をしたものの、なんとなく腑に落ちない気がした……  
どこが？と聞かれると答えられないのだけれど……

## 第29話 再会

日曜の朝、旅行鞆を片手に夫がダイニングへ現れた。

「先に行ってるから…」

そう一言いうと玄関へと向かった。いつもと変わらない表情だったのに、なぜか何かひっかかる気がした。けれど、朝の慌ただしさに紛れて、理由は分からないまま30分後、私も家を出た。

駅まで片道5分くらい。途中、近所の奥さんに出会って少し話した後、駅に着いた。

改札を抜けてホームを見回したが、夫の姿はなかった。

すると、鞆の中で携帯が鳴った。

「もしもし…」

「すまん…博子。さっき会社から電話があつて、どうしても行かなきゃならん用件が…悪いが先に行つてくれるか？なるべく早く済ませて追いかけるから…」

そう言うとき夫は、こちらの返事も聞かず電話を切った。

「…ホントに勝手なんだから。自分から旅行に誘つたのに…」

半ば呆れたものの、仕方ないか…と思い、列車を待った。15分後、到着した。指定席だったので、座席を探していると、

「こちらですよ…」

懐かしい声が後ろから聞こえた…。振り向く前に、頭の中では、何度も

「ありえない！」という言葉が繰り返していた…。

そう思いながらも、ゆっくりと声の主の方へと振り向くと、10年前と変わらぬ笑顔がそこにあった…。

「や、山田くん…？」

子供っぽさが消えたものの昔と変わらない素敵な笑顔のままの彼だった…。

「えっ?!でも、どうして…?どういふこと…?」

彼が生きていたことは嬉しいのに、現実が把握できない私は、素直に喜べなかった…。とりあえず、彼の隣に座ると、白い封筒を渡された。

### 第30話 結末(前書き)

長らく投稿が遅れて、すみません。いろいろ悩んだ結果の結末です。ぜひぜひご覧くださいませ。

### 第30話 結末

山田くんから手渡された封筒には、夫からの手紙が入っていた…。

博子へ…

結婚してから私が先日退職するまでの間、本当に家族のために尽くしてくれてありがとう。

また、この10年、君から笑顔を奪ってしまったこと、本当に申し訳なく思っている。

山田くんと的一件があつてから、私なりに夫婦のありかたについて考えてきたつもりだが、君の心が私の元へは戻りそうにないことを痛感した10年だった。

君は、あの事故以来、本当に家族のために働いてくれたと思う。子供たちも春には、それぞれの道へ進むだろうし、私の両親も旅立った。私も退職したし、今こそ、君を自由にする時だと思う。君と結婚できて幸せだった思い出を糧に、残りの人生を過ごそうと思っている。

本当に今までありがとう。そして愛している…博子

一気に読み終えた私は、口数の少ない夫の気持ちをようやく理解したような気がした…

夫は夫なりに私をずっと愛し続けていたんだ…と思うと涙が止まらなかつた…。

封筒の中には、夫の欄を埋めた離婚届が入っていた。ずっと隣にいた山田くんが、静かに口を開いた…。

「事故で僕の意識がなかなか戻らない間、ご主人さんが何度も両親に謝罪しに来てたらしいんだ…僕が一人息子で、まだ若かったからだと思う…なかなか回復の兆しが見えなくて、諦めかけてた両親を励ましてくれて…本当だったら、自分の妻に手を出すような相手な

んで、どうなつてもいいはずなのにね…正直、この10年、博子さんに会うために生きてきたけど、あなたをご主人から奪うのは無理だと、今はつきり分かったよ…」

山田くんの話を聞いて、主人の寛容さに驚いた…私が逆の立場だったら、到底許せる相手ではない…

山田くんの言うとおり、夫以上に私を愛してくれる人は、いるのだろうか…？

この10年の空白を埋めるように山田くと語り合った私は、目的の地へたどり着いたのに気付いた。そこは10年前、山田くと最初で最後のデートの場所、あの美術館だった…。

また、こうして山田くと一緒に来ることが出来るなんて…

10年前と変わらない景色…隣には変わらない笑顔の山田くん…

あの時は、これから始まる恋の予感にときめいていたはずなのに…今は、その恋が終わろうとしている…

こんなカタチで山田くとさよならするなんて思いもしなかったけど、でも、生きていてくれただけでも神様に感謝しなくちゃね…

いろんなことが走馬灯のように頭の中を駆け巡っていくなかで、山田くんは10年前と同じように、ゆっくり優しく抱きしめてくれた…

「もう一度、こうして抱きしめることができただけでも、神様に感謝かな…」

その言葉を聞いて、思わず笑って答えた私…。

「私と同じこと考えてる…」

本当に生きていればこそ、なんだ…とお互い感じた10年だったんだね。今は、別れることになっても、生きていれば、また出会えるし、大切な人には変わらないから…。そんな想いを込めて、私も山田くんを優しく抱きしめた…

「さよなら、山田くん。生きていてくれて、ありがとう…」

いつの間にか傾いた夕日に包まれて、二人のシルエットもオブジェの一部になっていった…

(終)

### 第30話 結末（後書き）

長い間、ご覧くださり、ありがとうございます。恋人や夫婦の在り方について、皆さんも考えてみてくださいね。いろんなご意見も頂きありがとうございます（＾Ｏ＾）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1470b/>

---

10年ぶりの恋

2011年2月3日07時24分発行